

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月1日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520099

研究課題名（和文） 障壁画の画題・表現・機能—会所から城郭へ—

研究課題名（英文） Motif, Expression, Function of the paintings on Sliding doors  
-from Kaisho in 15<sup>th</sup>.C to Castle in 16<sup>th</sup>-17<sup>th</sup> C.

研究代表者

並木 誠士 (NAMIKI SEISHI)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授

研究者番号：50211446

研究成果の概要（和文）：

15世紀から16世紀にかけての障壁画のうち、継続して調査をしている韃靼人図について、その受容のあり方を考察した。とくに、従来韃靼人図との関係を指摘されている文姫帰漢図だけではなく、台北故宫博物院所蔵の観獵図などの巻物形式の絵画が日本に伝来して、わが国の韃靼人図成立に大きく関与した可能性が高いことを、故宫博物院における作品調査のうえで確認をした。

研究成果の概要（英文）

I intended to clarify the origin of the paintings of Tartars in Japan and to show how the Japanese painters in 16th and 17th century began to draw "the paintings of Tartars".

As I already discussed in the former paper, the screen paintings of Tartars (Kyuuhaku version) formerly was the sliding doors, is the oldest colored Tartars paintings in sliding doors style. One of its characteristics is to include the scene of the procession. Though almost all screen paintings of Tartars are composed with the hunting scene and the polo game, the Kyuhaku version is composed with the hunting scene and the procession.

In conclusion, I think that the Lady Wenji's and the Emperor Huizong's story were the origin of the paintings of Tartars. Moreover, considering these two stories, the presence of the watcher of the hunting scene can be explained.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：日本美術史

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：美術史、障壁画、画題、狩野派、屏風絵、韃靼人図、中国絵画

- |                                    |                           |
|------------------------------------|---------------------------|
| 1. 研究開始当初の背景<br>本研究課題を開始する背景には、代表者 | がそれまでに取得した以下の科研費による研究がある。 |
|------------------------------------|---------------------------|

①「縁起絵巻の宗教的機能—室町時代後期を中心の一」（科学研究費基盤研究(C) (2)、研究代表者：並木誠士、平成7年度～平成9年度、計1,800千円）

②「風俗表現に見る近世絵画の特質についての研究」（科学研究費基盤研究(C) (1)、研究代表者：並木誠士、平成10年度～平成12年度、計2,600千円）

③「16世紀美術の多角的研究」（科学研究費基盤研究(C)、研究代表者：並木誠士、平成14年度～平成17年度、計3,100千円）

④「中近世絵画史における画題の形成と伝達・蓄積—狩野派を中心の一」（科学研究費基盤研究(C)、研究代表者：並木誠士、平成18年度～平成20年度、計2,100千円）

以上のように、代表者は、これまで科学研究費により、15世紀から16世紀にかけての絵画史をさまざまな側面から考察、分析してきた。今回の申請課題は、そのような蓄積の必然的な帰結として生まれた。

そこでの問題意識とは、

#### (1) 初期狩野派の絵画制作について

当該時期における障壁画制作の中心にあったのは言うまでもなく狩野派である。初代の狩野正信は会所において、おもに筆様により障壁画制作をするが、この「擬似唐物」とも言える絵画が、16世紀の大画面絵画の出発点となる。そのうえで、次代の元信から永徳にかけては、新しい画題を積極的に採用して障壁画制作をおこなっている。したがって、本申請課題において、初期狩野派の絵画制作についての研究成果は重要である。

#### (2) 中国主題の受容と和様化について

具体的には、耕作図、瀟湘八景図、韃靼人図、帝鑑図といった主題がこの時期の障壁画には頻出する。これらの画題は、もともとは中国から小画面で伝来したものであるが、わが国で大画面である障壁画として描かれてゆく過程で、さまざまな変容をとげる。その変容の過程を分析することは、やはり、本研究課題の重要な部分となる。また、これらの画題がどのように和様化したか、それにともないどのような機能の変化がおこったかということも視野に入れる必要がある。

#### (3) 古典主題の絵画化について

この時期の障壁画をおもに担当した狩野派の絵師による『源氏物語』や『伊勢物語』を主題とした絵画がほとんど報告されていないという事実をどのように考えるのかは、本課題にとって、おおきな問題である。つま

り、会所から城郭という障壁画制作の場の変遷のなかで、とくに狩野派の絵師たちにとって、これらの古典的な主題はどのように理解され、受容されていったのかという点を、場の機能との関係で考える必要がある。

というものであった。

#### 2. 研究の目的

本研究課題「障壁画の画題・表現・機能—会所から城郭へ—」は、わが国の15世紀から16世紀にかけての障壁画の実態把握を目指した研究である。障壁画は、建築と一体になり人びとの生活空間を形成するものだが、本研究では、とくに、15世紀における室町将軍邸における会所と16世紀から17世紀にかけての城郭に焦点をあてて、それぞれの建築空間のなかで、どのような画題が選択され、それがどのように表現され、見る/見せる人にとってどのような意味をもったのかを明らかにすることを目的とした。

具体的には、まず、15世紀において独立した建物として成立をした会所に注目をして、ここでの障壁画の実態と機能について考える。会所は文芸や喫茶、唐物鑑賞などがおこなわれる場である。そこにおける障壁画は、唐物とは異なりそれ自体が直接的な価値をもつものではなく、それに似せたもの、つまり「擬似唐物」として装飾的機能をもっていた。このような「擬似唐物」としての障壁画は、やがて、安土城で織田信長が諸大名に披瀝するような価値あるものに変貌する。そして、17世紀に入った二条城、名古屋城などでは、障壁画は一層政治的な意味を担うことになる。このような、会所から城郭にいたる障壁画の主題面、表現面、機能面の変遷と特質を明らかにしてみたい。また、本研究では、障壁画資料が比較的良好に残る禅宗寺院についても考察するが、その際に、16世紀という時期は、禅宗寺院が、塔所的塔頭から檀那寺的な塔頭に変質した時期であるという点に着目する。つまり、その変化は当然、禅宗の建築内に会所的な性格をもたらし、このような禅宗寺院方丈障壁画の変容が、やはり、会所から城郭への障壁画の変遷を考えるうえで重要な示唆を与えてくれると考えた。

#### 3. 研究の方法

研究の方法としては、まず、石山本願寺・聚楽第、大坂城関係の文献資料を、歴史、宗教史、経済史、建築史など多様な分野から探

し、それを分析する。

一方、上記のおもに文献面での作業と並行して、本来は城郭、寺院等の障壁画であったもので、現在は各地の寺院、美術館・博物館あるいは個人宅などに屏風形式、掛軸形式などで所蔵されている16世紀、17世紀の「元障壁画」を調べる。断片的にしか残っていない「元障壁画」については、完結した作品ではなく、また、保存状態も十全ではないものが多いため、十分な調査、報告がなされていない場合が多い。しかし、現在静嘉堂文庫美術館とボストン美術館に分蔵されている韃靼人図が、もと大徳寺興臨院障壁画の一部であったと推定されるなど、「元障壁画」の研究の必要性は次第に認識されつつある。その調査を継続して進め、それらを美術史上に正当に位置づける。

申請以前に調査をおこなった作品を含め、現存する「元障壁画」の現状分析と原状の推定作業をおこなう。具体的には、16世紀の「元障壁画」であることがあきらかな韃靼人図（九州国立博物館蔵）、唐人物図（宇和島市伊達博物館蔵）、花鳥図（名古屋市長見寺）、唐人物図・梨花花鳥図（名古屋市長正寺）、牡丹図（香川県善通寺）、唐人物図（京都個人蔵）などについて、描写方法、寸法などの側面から制作当初の状態を復元する作業をおこなう。

画題に関しては、当該時期の作品には中国を主題とした作例が多いため、唐美人図、唐人物図については、『史記』その他中国の文献から、その画題の特定につとめると同時に、帝鑑図のような作例に関しても『帝鑑図説』をさかのぼる出典の解明につとめる。この点に関しては、中国における、たとえば徽宗皇帝や文姫をめぐる物語を題材とした絵画がわが国に伝来し、襖絵や屏風絵に描かれるというかたちで受容されていく間に、物語的な要素が希薄になり、より視覚的興味が優先されるようになるという変容の過程をも明らかにしたい。

また、石山本願寺・聚楽第関係の資料を、歴史、宗教史、経済史、建築史など多様な分野から探し、それを分析してゆくことを継続しておこなう。

#### 4. 研究成果

15世紀から16世紀にかけての障壁画のうち、とくに中国から伝来した主題について、その伝来が巻物などの小画面形式の絵画であり、それが日本で襖絵、屏風絵といった大画面に置き換えられる際に、表現方法にさまざまな変容がくわわることが明らかになった。

具体的には、継続して調査をしている韃靼人図について、その受容のあり方を考察した。とくに、従来韃靼人図との関係を指摘されている文姫帰漢図だけではなく、台北故宮博物院所蔵の観獵図などの巻物形式の絵画が日本に伝来して、わが国の韃靼人図成立に大きく関与した可能性が高いことを、故宮博物院における作品調査のうえで確認をした。それにより、巻物という小画面から襖や屏風という大画面への表現の変化だけでなく、中国で成立をした、文姫や徽宗皇帝にまつわる辺境の匈奴と中原の漢民族との説話絵画が、伝来し受容される過程で、物語的要素が次第に希薄になり、やがて異民族風俗に対する関心が先行し、結果としてわが国で見るとような韃靼人図が成立したことを示した（学会発表：「韃靼人図の受容と展開についての一試論」、研究論文：「韃靼人図の源流を求めて-九博本を手がかりに」）。

また、障壁画の機能を考えるうえで重要な16世紀から17世紀における大画面絵画のあり方を考えるために、作品調査のうえで、資料的な価値を認めた屏風絵作例について、作品の分析結果をまとめ、報告した（論文：「田中本家蔵花鳥図屏風について」、論文：「八雲本陣蔵《源平合戦図屏風》について」）。

田中本家所蔵の花鳥図屏風は、従来紹介されたことのない作品であるが、15世紀の花鳥図屏風の様式をとどめた作例で、大画面花鳥図の展開過程を考察するのに重要な作例である。また、八雲本陣所蔵の源平合戦図屏風は、数多い源平合戦図のなかでも独自の位置を占める作例で、やはり未紹介であった。

これら2品は、ともに江戸時代後期における作品鑑定に関する重要な資料をともなっており、幕末・明治期における地方旧家が所蔵する絵画の鑑賞と鑑定をめぐる中央との関係についても貴重な資料となった。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ①「八雲本陣蔵《源平合戦図屏風》について」  
並木誠土、『美術フォーラム21』24号、査読有、pp.4-11、2011年
- ②「田中本家蔵花鳥図屏風について」  
並木誠土、『美術フォーラム21』22号、査読有、pp.6-13、2010年
- ③「韃靼人図の源流を求めて-九博本を手がかりに」  
並木誠土、『デザイン理論』（意匠学会編）58号、査読有、pp.65-74、2010年

〔学会発表〕（計1件）

- ①並木誠士「韃靼人図の受容と展開について  
の一試論」意匠学会第 202 回研究例会  
2010 年 5 月 15 日  
於：大阪芸術大学ほたるまちキャンパス

〔図書〕(計 1 件)

- ①中公新書『絵画の変-日本美術の絢爛たる  
開花』  
並木誠士、中央公論新社、査読無、271p、  
2009 年

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

並木 誠士 (NAMIKI SEISHI)  
京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授  
研究者番号：5 0 2 1 1 4 4 6

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：